

〔「文人のまなざし」展によせて〕

名勝を描く一明・清時代蘇州文人をめぐる

詩書画に親しみ、自らもそれを制作した文人は、友人との語らいや名勝への旅などといった文脈の中で、様々な作品を生み出しました。本稿では、彼らが名勝へと向けたまなざしの中で生まれた作品について、明清時代の蘇州文人の作例を中心に紹介したいと思います。

16世紀後半からは、旅游趣味の流行をうけて、様々な名勝が絵画化されました。しかし蘇州文人は郊外の名勝だけでなく、地元の名勝を描くことにも強い関心を示しました。その背景には、古来より文人墨客に愛されてきた故郷・蘇州への誇りがあり、景勝美のみならず、その地に蓄積した歴史文化を称揚したいという想いがあったからでしょう。以下、石湖という蘇州の名勝をとりあげ、蘇州文人がいかに故郷の名勝を絵画化したかを見ていきます。

石湖は、蘇州西南に位置する太湖の一支湾をなす湖で、呉越春秋の史跡を有する景勝地として古くから知られ、多くの文人墨客に愛されました。特に明時代の15、6世紀には、呉派文人画壇の中心人物である文徵明(1470～1559)をはじめとする文人達の雅会の地となり、数多くの詩書画が生み出されました。石湖を愛した文徵明は、「石湖清勝図巻」(1532年、上海博物館、図1)などの石湖図を制作しました。そしてこの文徵明の石湖図の表現が、後の世代の石湖図の祖型となり、描きつがれてゆくことになります。つ

まり画面右に、「コ」の字型に湖水を包むかのように、楞伽寺塔を頂く上方山をはじめとした、石湖湖畔の連山を配します。この他にも、画面下方に行春橋といったランドマークが表されます。こうした大まかな構図と定型モチーフが、後の画家の石湖図にも踏襲されてゆくのです。文徵明の次男である文嘉(1499～1582)の「石湖秋色図」(台北故宫博物院、図2)、弟子である銭穀(1508～72?)の「石湖八景図冊」第一図「石湖」などは、後世の画家が、文徵明の拓いた石湖図の型とモチーフを概ね守りつつ、軸装や画冊といった様々なフォーマットに再構成していったことを窺わせます。彼等にとっては、型の踏襲そのものが師である文徵明を懐くことであり、石湖の名声を高めた文徵明の記憶を、画の中に内包することだったともいえます。

明末から清時代には、かの「瀟湘八景」の如く、蘇州の各名勝に異なる時間帯や気候をあて、「虎丘夜月」「靈巖積雪」といった画題のもと1セットとした画冊が多く現れました。これらは「姑蘇十景」「蘇台十二景」などと題され、その中で石湖は概ね「石湖烟雨」として絵画化されました。現存する「石湖烟雨」画題の作例は、蘇州の画家・張宏(1577～1668～?)「吳中勝覽図冊」(1632年、北京市文物商店)中の「石湖烟雨」(図3)のように、概ね「石湖清勝図巻」の型を用いています。



図1



図3



図2



図4

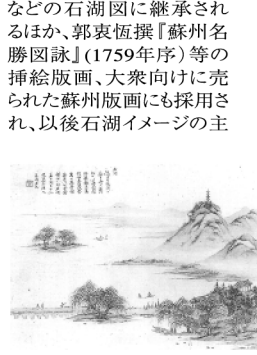


図5



図6

蘇州の画家達のあいだで「石湖烟雨」の画題とイメージが共有されていたことを窺わせます。なぜ彼らは、「石湖烟雨」においても文徵明石湖図を踏襲したのでしょうか。まず「石湖清勝図巻」の広く湖水と空を表す構図が、雨天の湿潤な空気を表す際にも非常に効果的であったためでしょう。また「石湖烟雨」という画題に着目するならば、文徵明は「石湖花遊曲詩画巻」(詩巻:1514年、画卷:1520年、上海博物館)という書画合装の石湖図も残しています。本作は元時代の文人・楊維禎(1296～1370)等が、烟雨の石湖で雅会を行った記憶を詩画巻にとどめたもので、本作を契機として、烟雨の石湖は往時の文雅をしのぶ景として、同時代の人々に広く認識されたと考えられます。蘇州出身の画家である張宏等は、各名勝に伝わる文人雅集を当然理解しつつ、名勝図冊を制作していたでしょう。「石湖烟雨」画題は、石湖にまつわる元時代の雅会と、それを有名にした文徵明の記憶を、その画題と構図において想起させるものであったかもしれせん。

石湖表象は、清時代の乾隆帝(在位1735～96)による第二回江南行幸(第二回南巡。1757年6月)以降、大きく変化します。乾隆帝が石湖を訪れた際に留まった湖畔の石仏寺と、乾隆帝のためにつくられた湖心亭というランドマークを、大きく正面にとらえた構図で描かれるようになるのです。この視点選択は言うまでもなく、石湖が乾隆帝ゆかりの地であることを、何より先んじて鑑賞者に想起させるためのもので、19世紀前半の袁沛「石湖天鏡図」(個人蔵、図4)などの石湖図に継承されるほか、郭衷恆撰「蘇州名勝図詠」(1759年序)等の挿絵版画、大衆向けに売られた蘇州版画にも採用され、以後石湖イメージの主

流になりました。

しかしその一方で、文徵明画を祖型とする石湖図も描かれ続けました。張伯鳳「停雲館紀遊図冊」(1819年、広東省博物館、図5)中の石湖は、「石湖清勝図巻」と同様の構図と視点で描かれます。張伯鳳は、本図の画風は文徵明に倣ったといっています。また画面左上の自題では、春秋時代の呉王闔閭、范蠡、南宋の范成大といった石湖ゆかりの歴史人物・文人とともに、石湖の水景の向うに続く太湖について想起しています。本図における「石湖清勝図巻」の型の踏襲は、文徵明画風に倣う作であったことにもよるでしょう。しかし自題をふまえると、張伯鳳は、乾隆帝南巡以前の石湖を想うべく、この型を選んだのではないのでしょうか。なぜなら南巡以後の石湖図の視点は、太湖へと続く石湖の広大な水景を閉じ、同時に乾隆帝以外の記憶を想起しづらくしてしまったからです。また蘇州出身の文人画家である張伯鳳は、当時民間で量産されていた石湖図のイメージではなく、文徵明の構図を用いることが、同じ蘇州を出自とする文人画家として、より好ましいと考えたのではないのでしょうか。

本展観では、清・方士庶(1692～1751)の「山水図冊」(当館蔵、図6)のような、画家が故郷の名勝を想起しつつ描いたとみられる名勝図冊を展示します。文人が故郷への思慕をいかに絵画表現に反映させたかは、今後も深めてゆくべきテーマといえます。(都甲さやか)

※図1は上海博物館より提供、図2は『故宮書画図録 29』(台北故宮博物院、2010年)、図3、5は『中国古代書画図目』(文物出版社、1990年～)、図4は『中国絵画総合図録 続編 第三巻』(東京大学出版会、1999年)から複写しました。